



昭和47年(1972年)
3月号(No. 321)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
イザルケ岳……………山本朋三郎…	1
深田久弥著作展目録②……………	2
奇探探検……………	7
1971年のヒマラヤ	
千葉大マカルII……………	4
九州大ダウラギリV……………	4
長野山協ガンガブルナ……………	4
大阪府岳連カンジロバ……………	4
千葉工大アナンブルナ南峰……………	4
岩峰登高会チョンラピーク……………	5
海外通信	
N・Z便り……………	6
テラ・デル・フエゴ……………	6
アルジェリー便り……………	6
図書紹介	
わが越後の山……………	7
放浪のあしあと……………	8
画文集ヒマラヤ……………	8
図書室便り	
新刊図書受入報告……………	9
図書委員会報告……………	9
会務報告	
二月理事評議員会……………	9
現地支部長会議のお知らせ……………	9
ルーム日誌……………	10
第280回現地小集会……………	10
新入会員……………	11
その他	
ティルマンは健在なり……………	11

イザルケ岳

山本朋三郎

ケ岳はどんな意味をもった山の名前だろうか。結論を先に申すと、イザルケ岳はその形がザルのような形をしているのでその名がつけられた、といわれている。

イザルケ岳のイザルはザルと同じ意義の言葉である。ザルとは一般的に、竹の皮をはいで編む物入れザルⅡⅢⅣのことである。竹または樹枝等を丸く編んだ入れ物は、大きな物は主として運搬用に、小さな、そして編みの細かなものは、食物を洗いそそぎ、あるいは湯水にくぐらせたりするのに用いられる。道具の便利さを知った人間はその道具の名前を考えるのは当然前である。その道具の名前がないと、他人とその道具のやりとりをする時不便である。その動作を繰り返している中に、その道具の名前とされて、他人の達と意思の交換の用に使われる。

ザルに物を入れ湯を通すことを『湯かけ』『湯掛』と呼んできた。湯をかけた穴の中で物をかきまぜて異物を洗い出すことを『湯掻き』と名付けられている。物を洗ったり湯をかけたたりするに用いる、竹や樹皮や細枝で編んだ物を動作でいい表わした。『湯を掛けて物

を洗うに使う、箆で編んだ入れ物』が動作の湯を掛けることがその編物の名となつて、ザルといわれ始めたものである。

この植物の樹皮で作った『湯注』『湯掛』という道具を、持ち上げると水や湯が樹皮や細枝で編んだ目から長く通って、編んだ目には食物が残る。つまり水や湯が下方へと『湯が去ってゆく』ように見える。湯が去るので『湯去り』『湯去』である。湯掛とともに、後半の状態と動作から『湯去』という言葉も創られて、『湯注』『湯掛』と同じ意味に用いられるようになった。また、この水分が下にたれ落ちてゆくことを古語で『したむ』というが、物を入れる箆のことを『箆溜』と

も言っていた。これに対して、箆を入れる箆(かこ)であるので『箆溜』とも書いた。これは日本に定った日本古来の文字がなく、となりの大陸、中国の文字が日本に持ち込まれ、主として、大陸からの移民に依り使われ始めたので、最初は一つ物に対して、色いろな漢字が使われていた。『箆の箆』とも書いて、それぞれ『箆溜』『箆溜』と発言させた。みな『ゆさり』のことである。

これらの『湯注』『湯掛』『湯去』『箆溜』『箆溜』『箆溜』といういろいろな言い方もだんだんと一つのいい方になって、あるいは二つのいい方が混じわたりして、長い間、多くの人間の耳から口へと伝わるうちに、ゆかけ・ゆさり・いかきというものが、ゆけいといれ替わたりして、いつの間にか『いさる』という言葉が、樹皮や細枝で編んだ物入れの道具の名前に固定されて来た。随分と長い時間と、多くの人の耳から口へと伝えられた結果である。

この『いさる』のさは清音であったり濁音であったりした。いさるⅡⅢⅣと時代がさらに下りますと、いさるのいをはぶいていうようになり、現在私達が使っている、箆ⅡⅢⅣ、という言葉になった。安永年間に出版された『物数称呼』という本に『箆、幾内ニテいかき、江戸ニテさる、安芸ニテしたみ、遠江ニテゆかけ』と説明されている。山の名前のイザルケ岳のイザルは、ザルの古語であることが判かった。このイザルケのケはがと読まなくてはならない文字である。イザルケ岳と地図

にもカタカナ書きの場合が多いので、中には、箆が岳と本来読まねばならぬ山の名前を、カタカナの通りに、イザルケと素読してしまふ人がいるが、これは間違っている。このケをがと読むのは『八ヶ岳』『駒ヶ岳』の、がと同じである。『……』のような原形をしたとか、『……』のような意味をもたされた文字なのである。従って、イザルケ岳とは、ザルのような形をした山、ということになる。

ザルといつてもこの場合の古語のザルは、米をとぐのに用いられた、丸味のある、口の広い、やや浅い、米とぎした後で水を切るザル、を言ったと思われる。そばを湯せんするのに使う細長い先の尖ったザルではなかったようである。浅い口の広い、米とぎザルを想わせるような、山の姿として、このイザルケ岳が眺められる地点がどこかになくてはならない。

このザルのように見える地点を決めるのも、現在の登山道ばかりでなく、昔の山道はどこを通過していたかを充分に考えて推測しなければならぬ。日本が南北朝に分裂して、大いに国が乱れて、勝者、南北朝北方などの政治的な事からまり合って、日本をほぼ、南北に横断して分離させる役目をはたしていた、南アルプスを越える山道は、現在ではちょっと考えられないところがある。随分と利用されてきたものである。信州の木沢村と、駿河国を結ぶ山道として、易老越えの、信濃河内(ル)にあるが、大昔はしばしば使われていたらしい。一つの理由として、駿河の領内にありながら、河の名前がすでに、信濃河内内を通行してゆくこと、地図上でも判断出来るが、光岳を覆って、丸いイザルケ岳から張出している。大きなザルを伏せたような尾根である。これ

は信州の易老側の谷間からは見えない。別の地点でイザルケ岳がさるのような形に見えるところは、光岳の稜線上の、広々とした高原状の、センジケ原をだたらと北に向って下って行くところと、色とりどりの高山植物に囲まれて、ちょうど、大きなすべを従長に切ったように、後方がやや高く、丸味をもって先が低くなって来る地形が見える。ちょうど、先の口の開いた、米とぎザルを伏せたような形の山頂が見られる。これがイザルケ岳である。

深田久弥 著作展

出品目録および解説②

日本アルプス

昭和三十三年十二月 修道社 A

4判 本文四三頁 写真一四八頁 一七〇〇円

風見武秀、船越好文、三木慶介ら二十五氏の山岳写真に「日本アルプス」「日本アルプスの山々」をあらたに書きおろした。巻頭のエッセイ「日本アルプス」は著者の登山体験をとおして語られる簡潔な「日本アルプス登山小史」であるが、その景観の美しさ、溪谷の美しさ、四季の微妙な変化の美しさをのべて「無数の思い出が私の記憶の中に堆積されている」と語っている。

「結局私の山登りは、高村光太郎の歌のように、山へ行き、何をしてくる、山へ行き、みしみ歩き、水飲んでくる、それだけが全部であったようだ。せめては、私は山のような人間にならねばならぬ。山のような文章を書けるようにならねばならぬ。」
深田さんの心情のこもった美しい言葉である。

国の人なのであるか。信濃俣河内を昔の狩人や落武者や山師達が往来していたとすると、心ずしも静岡県側の人々が名付けた山とはいき切れない。方言学辞典を見ると、いさる、筑の方言を使用するのは、静岡・山梨・長野・岐阜県恵那郡とされている。

イザルケ岳の山名を考えるもう一つの語源がある。この語源は「イザル」
「膝行る」(尻を地につけながら進む)ということから考えられる。この語源からイザルケ岳を考えると、膝行っていった、または膝行った山、という意味

氷河の旅

—ジュガル・ヒマール探査行—

昭和三十四年三月 朋文堂 風見武秀(写真)との共著 序文山川

男一郎 B5判変型 本文一八七頁 写真別丁六一頁 地図別丁一

葉 構成・石川正夫 八五〇円
昭和三十三年春、深田さんは多年の念願がかなってヒマラヤにむけて出発する。同行は写真家風見武秀、画家山川男一郎、医師古原実という異色のメンバーで平均年齢四十五歳、AAC(アーチスト・アルパイン・クラブ)と名づけられた。深田さんの理想としていた気軽なスモール・エクスペディションが実現されたのであった。本書は、現地から「朝日新聞」に寄せられた連載記事をもとに一巻にまとめられたもので、出発準備からさまざまな難関をへて、ジュガル・ヒマール、ランタン・ヒマールの山旅が刻明に記録されている。公式団体には束縛されぬ自由気ままな登山隊で、「もし登れたら登てみよう」ぐらいの気構えであった。しかし著者は「ヒマラヤ七〇〇〇mの山へ登頂しようとするには、登れたら登てみよう」というような中途半端な覚悟では駄目である。「ちかかって国を出る」態の決心が必要だと書く。

味の山となる。光岳から東北に広がるセンジケ原の北端に、丸味のある山頂を見せるのがイザルケ岳である。光岳をつまんで、左右に引き伸ばすと、真中に、広々とした、センジケ原が出来上り、光岳のもう一つの端はゆるい傾斜をつけてイザルケ岳が残る。その端は急に落ち込んで信濃俣河内となり、西方は三吉小屋跡のホツヘと落ち込む地形になる。光岳から、センジケ原をいざり通って北端に、光岳の一部がいざりよった様な地形とも考えられる。光岳からいざり通った山であるので、

イザルケ岳の山名が起きたのかも知れない。
いづれにしろ、イザルケ岳を命名した人、及び時代は明治の頃あるいはそれ以後と思われる。というのは、徳川時代末期に書かれた井川村誌には、光岳の名は無く、三隅嶽として記されているので、少くとも、正式の山の名の興りは、明治以後と判る。従ってセンジケ原も、イザルケ岳も比較的新しく名付けられた山名であることが判る。信濃俣河内湖行か、光岳からの眺めからかは決り難い。昔から信濃俣河内

山さまたま

昭和三十四年六月 東西五月社

B6判 本文二五四頁 写真別丁四頁 三〇〇円

「湯沢の一年」(子供連れの谷川岳「山の本」(葉師から拾った)「スキー三十年」など二十三篇を収める紀行随想集。戦後、湯沢・大聖寺・金沢に移り住んだころの文章が主であるが、なかでも巻頭の「湯沢の一年」は、復員後の著者の生活が上越の山歩きを描写とともにうつつれ、タケノコ生活のなかにも深田さんのおおらかな人柄がのびる格調高い文章となっている。また「家族登山」は一家四人で立山に登ったとき(二十九年)の話だが、よき父親ぶりと子供にたいするおもしろい観察がある。

三月に日本を出てから六月に帰着するまでの行程・登高・見聞を力みもせずたんと描いているがそれだけに読者につたわってくる迫力は大きい。山岳に文学という領域をくりこんだ著者にしてみればじめてなし得たものであろう。後日談としてシェンバ、雪男のこゝ、遠征経費について、また「ヒマラヤへ志す学生諸君へ」と題するユーモラスでしかも現実的な忠告をのべている。

登山十二ヵ月

昭和三十四年八月 角川書店 文庫判 二二二頁 九〇円

昭和十八年刊行の「山岳紀行」と同じスタイルで、旧著より二十二年篇を採録。いずれも最終戦以前の紀行文であるが、著者は「はしがき」で「人為はにかに移って、山の永久の姿は変わらない。その姿を幾分でも表現したいのが私の目的であった」と書いている。わが愛する山々

「私が妻に見えている山々の説明をしていると、二人の子供は喧嘩をし始めた。公平に分配した桃の確詰の残りの奪い合いが原因である。彼等はこの崇高な頂上に来て、四周の大観をほしにいまにすする暇に、一片の桃の果肉などを争っている。所詮風景観賞とは大人の持つ高尚な感覚であって、子供たちは人間原始の域から脱け出していないのである。」

のコースがあり、今は廃道になっているが、昔は大いに人の往来した事実や、幕末に群衆争いが井川村と上川根村との間にあったことなどを考えられるかなりの人は入山していたと思われる。

登山十二ヵ月

昭和三十四年八月 角川書店 文庫判 二二二頁 九〇円

昭和十八年刊行の「山岳紀行」と同じスタイルで、旧著より二十二年篇を採録。いずれも最終戦以前の紀行文であるが、著者は「はしがき」で「人為はにかに移って、山の永久の姿は変わらない。その姿を幾分でも表現したいのが私の目的であった」と書いている。わが愛する山々

「私が妻に見えている山々の説明をしていると、二人の子供は喧嘩をし始めた。公平に分配した桃の確詰の残りの奪い合いが原因である。彼等はこの崇高な頂上に来て、四周の大観をほしにいまにすする暇に、一片の桃の果肉などを争っている。所詮風景観賞とは大人の持つ高尚な感覚であって、子供たちは人間原始の域から脱け出していないのである。」

日本の山が好きになった。大きさや優さはなくとも本当に美しい。……一つの山に親しみそれを知悉する行き方を私は尊重する。しかし私の念願は日本のおもな山へ全部登りたい。それは数にして言うまでもなく二十五パーセントほど残っている。天よ、私に健康と意欲を恵みたまえ。」

シルク・ロード

昭和三十七年十一月 角川書店
新書判 本文二〇九頁 地図別丁 一葉 二二〇

雑誌「世界の旅・日本の旅」の連載記事を中心にとめられた一冊。著者はヒマラヤ研究のかたわら中央アジアに想いを注いでいた。多彩な歴史にうらづけられた東西交流の道と、そこにあらわれる探検家につよくひかれていた。本書はその第一着手点である。

日本アルプス

昭和三十八年五月 風見武秀氏と共著 社会思想社 文庫判 本文二二二頁 二四〇頁

修道社版「日本アルプス」の小型判化。風見氏の山岳写真一〇〇枚余をおさめる。

山があるから

昭和三十八年六月 文芸春秋新社 新書判 本文二五五頁 二二〇頁

「北海道の山脈」「瑞穂山」「雨の徳本峠」などの紀行文十四篇、「登山家という人種」「登山と年令」などの随想九篇、「ヒマラヤの女性登山家」「本集め」など九山房主人をほうふつとさせるヒマラヤに関するエッセイ七篇を収める。

ヒマラヤの高峰 第一巻

昭和三十九年六月 雪華社 B 6 判 本文二二〇頁 写真別丁四頁 四八〇頁

ヒマラヤの高峰 第二巻

昭和三十九年九月 雪華社 B 6 判 本文二二九頁 写真別丁四頁

四八〇頁

ヒマラヤの高峰 第三巻

昭和三十九年十二月 雪華社 B 6 判 本文二二四頁 写真別丁四頁 四八〇頁

ヒマラヤの高峰 第四巻

昭和四十年三月 雪華社 B 6 判 本文二二〇頁 写真別丁四頁 五二〇頁

ヒマラヤの高峰 第五巻

昭和四十年十月 雪華社 B 6 判 本文二二〇頁 写真別丁四頁 五二〇頁

深田さんの多年にわたるヒマラヤ研究の集大成であり、総決算である。昭和二十八年以来十二年間、ほとんど休むことなく「岳人」に書きつづられたヒマラヤ記事は、この五冊によって全的な統一を得られたといっている。その間、入手し得るかぎりの文献と地図をあつめ、世界各国の山岳会誌や会報に目を通し、新聞の切抜き帖を作成したという深田さんは、みずから「およそヒマラヤに関係のある記録は一つも逃すまいとする緊張が十数年続いた」と書いたほどに、この研究に情熱をかたむけていた。

第一巻には「ヒマラヤ概観」につづいて、エヴェレスト、スターリン峰など十一座、第二巻には「ヒマラヤ略史」のほか、K2、テント・ピークなど十四座、第三巻には「高所ボーター」のほかカンチエンジュンガ、ブモ・リなど十二座、第四巻には「シェルパ列伝（上）」のほかナンガ・バルバット、グンなど十二座、第五巻には「シェルパ列伝（下）」のほかマナスル、カン・テンリなど十二座がそれぞれ収められているが、この六十一座だけでは、雑誌に書きつづられた高峰のすべてを網羅したというわけではない。五冊という制約があったためもあるが、深田さんの構想ではなお五巻分を必要とする大きなものであった。

「ヒマラヤの高峰」が完全にまとまった際には「その後の仕事は若い有為な人に任せて、私はヒマラヤから退こう」と著者は「あとがき」に書いて、つぎの仕事（中央アジア探検史研究）にすむ決意のほどを示している。本書には諏訪多栄蔵氏をはじめ多くのヒマラヤニストの協力のもとに、「高峰表」「登頂峰一覧表」「シェルパ・リス」など日本によるヒマラヤ登山表などがそえられている。

昭和三十九年七月 新潮社 B 5 判 本文二二二頁 写真別丁四頁 八七〇頁

深田さんは戦前から「日本の名山」執筆の構想をいだいていた。さきに記したようにその一端は「文学界」その他の雑誌に連載というかたちであられたが、戦争その他の事情から中絶せざるを得なかった。

ヒマラヤ踏査の翌年、「山と高原」に連載しはじめたのがこの「日本百名山」である。（34・3・38・4）日本全国の山々のなかから、北は利尻岳から南は宮の浦岳までの百座がつぎの三つの選定基準によってえらばれた。

一、山の品格。人間にも人品の高下があるように山にもそれがある。人格ならぬ山格のある山でなければならぬ。

二、山の歴史。人間と深いかわりをもつ山、山霊のこもっている山は名山の資格をもつ。

三、個性のある山。その山の具えている独自のものを尊重する。（附加的条件として高度一五〇メートル以上の山であること。ただし筑波山と開聞岳の二山は例外。）

この選択に自信をもちえたのは、五十年にわたる著者の登山歴であった。「日本百名山」はあらゆる視点から山を眺め、実際にその絶頂をふんで探りさだめた百座であって、「わが山山」以来の山岳紀行文もすべてこの一点にかかっていたといっている。深田さんの代表作である。昭和四十年二月、読売文学賞（評論・伝記賞）を受賞。選考委員の一人小林秀雄氏につぎの選評がある。

「評論の部では、私は深田久弥氏の『日本百名山』を推した。これは、近ごろ最も独特な批評文学であると考えたからである。批評の対象が山であるという点、たいへんおもしろいのである。著者は、山を人間と見なして書いているといっているのだが、山が人間なみに扱えるようになるには、どれほど深山の山々と実地につきあわなければならなかったろう。……山格について一応自信ある批評的言辭を得るのに、著者は五十一年の経験要した。文章の透逸はそこからきている。」

想い出の旅

昭和四十年四月 角川書店 文庫判 本文二二二頁 二二〇頁

これまでの著者から「山上の池沼」「鳥海山の春」「甲子温泉」など十五篇をえらび、風見武秀氏らの写真をそえた紀行文集。

山岳通歴

昭和四十二年九月 番町書房 四判 本文二五四頁 四六〇頁

昭和三十八年三月、深田さんは還暦をむかえた。「私の骨も肉もまだ強靱である」と書いて、著者は人生の長距離競争にあらたな意気にもえていた。巻頭の「愉しき山行」におさめられた梶尻岳、トムラウシ、太郎山、大峰山、高峯、乙妻、伊吹山、那須岳、祖母山、傾、阿蘇山、塩見岳の諸篇はみな還暦後の山旅の産物。山川男一郎氏と同行

した日高山脈では、地元の山仲間のおたかい歓待をうけ、雨の塩見では若い仲間にかこまれた氏の温顔がある。「山によせて」には、信仰登山、北アルプス登山史、冒険の精神、ヒマラヤの先駆者たち、西域の探検家、鉄の時代の六つのエッセイがあり、「憶い出の人」「山の本と映画」では、山の友人の追憶田辺和雄・山川男一郎（書評「わが山旅五十年」ほか）、山の映画評（エヴェレスト征服ほか）を収める。文筆家としての著者の多彩な活前を知る上で参考になる一冊である。（近藤信行）

「比摩拉耶紀行」

日本人による初期ヒマラヤ文献前号のあとがきでちょっとふれておいたが、このほど入手した「内外大家世界探検」という本に、桜井箕峯という人が「比摩拉耶紀行」という一文を書いているのを発見した。この本は明治三十四年九月文明堂発行となっており、徳富蘇峰のセイロン紀行、志賀重昂の濠洲紀行など含まれているが、桜井箕峯の「ヒマラヤ紀行」は、明治三十三年一月、武田無堂と同行、マージリンからタイガーヒルに到り、ヒマラヤの大観を眼にした紀行で、エベレスト、カンチエンジュンガ、ジャヌー、カブルなどヒマラヤの巨峰十座の標高やダーズリンからの距離、カンチエンジュンガの山名の由来などくわしく説明してある。

またエベレストについても、サー・ジョージ・エベレストの名を採ったもので、二万九千二百フィートの世界一の高峰であると正確に解説している。そのほかシシキムにも足を伸ばしており「其丈大雄岩、立山を嶮とし、富士を高しとするが如き者の夢想し能わざるところなり」といっている。（山崎安治）



1971年のヒマラヤ B ポストモンスーン

TIRICH・MIR 南面 津田文夫氏写

一、千葉大学東ネパール学術調査登山隊

マカルーII峰(カンシユンツェ、七六五九m) 試登

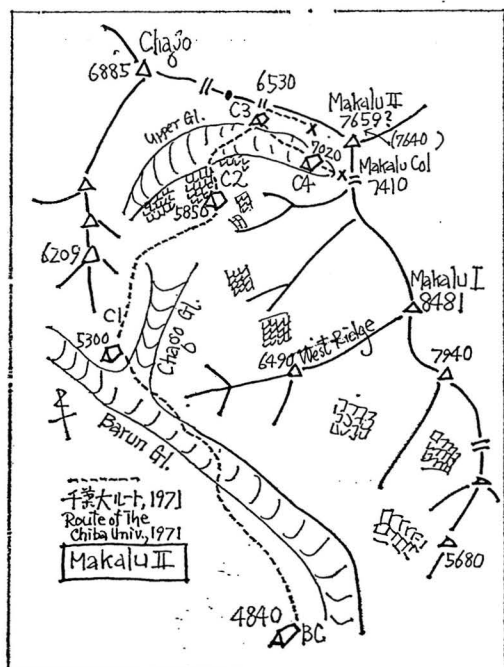
隊員、沼田真(隊長、52)、西田誠副隊長、43。

一、登山班・小浜浩三(登攀隊長、35)、今井幹雄(31)、遠藤宗男(31) 西村政晃(30)、吉永英明(29)、高木邦夫(28)。

二、学術調査班・鈴木一元(調査隊長、38)、大沢雅彦(25)、遠藤宗男(兼任31)、ブスバ・ラトナ・シャキヤ(28)。

シエルバ、二名、サード一人。往路、カトマンズ(824)、ダーラン(827)、ブンギン(登山班、910)、BC(915)、バルン・ボカリ、四八〇〇m。

登山活動、C1(921、バルン、チャゴ両水河合流点、五三〇〇m)、C2(924、チャゴ水河水瀑、五八三〇m)、C3(108、マカルーIIと六八八五mのチャゴとのコル、六五五〇m)、西陵困難放棄、南陵に変更、C



3を六四〇〇mに移動、C4(七四〇〇m)のマカルー・コルの下、七二〇〇m、1015、高木とシエルバ、マカルーII直下七三〇〇mに達す。高木方より動作が鈍くなり、夕食も殆んどとれなかった。1020、高木、高度障害のためC2で死亡、BC(1027)29、カトマンズ(1116)。

学術活動、植物生態学、土壌学、建築学、微生物学。
資料(小浜、今井両君よりの私信並びに在ネパール日本大使館宛報告書等及び一月発行の仮報告書)

二、九州大学山岳会

ダウラギリV峰(七六一八m) 試登

隊員、白水隆(隊長、54)、松村哲男(副隊長、42)、樋口忠治(36)、中溝幸夫(28)、高山哲信(27)、杉本勝(26)、森部清司(23)、浅野幸男(22) ラクバ・テンジン(33)。

登山活動、カトマンズ(825)830及び96、ボカラ(831、98)、TBC(ミアンディ・コーラ、三三〇〇m、921)、BC(四五〇〇m、923)、C1V(峰南東稜六二〇〇m峰、白い峰)よりの東スパー下、五三〇〇m、C2a(白い峰支稜上五

九〇〇m、上部偵察目的)、104、高山他二名、C1-C2a、白い峰支稜よりトラバース、第三岩稜偵察、他は第四岩稜より方角五九〇〇mにある丸岩の下にC2b(千々岩、浅野、ラクバ・テンジン及びアン・ニマ)、106、C2bの四名、C2上部右方角ルンゼにルート作業を行っていたが、11時40分上部で発生したナダレにより、五九五〇mより六〇〇m落下、千々岩死亡、シエルバ二名軽傷、登攀中止。1010、TBCで遺体火葬。

三、長野県山岳協会

ガンガブルナ(七五四四m) 新登頂後事件

隊員、清水澄(隊長、35)、小林一智(副隊長、31)、宮坂尚樹(32)、小木曾巖(29)、塩原明(28)、木下洋亮(28)、赤羽武士(28)、若林義登(27)、笹川広平(25)、箱山益雄(22)。

登山活動、ボカラ(828)、BC(アンナプルナ東水河、三九五〇m、97) C1(912、五一八〇m)、C2(922、五九〇〇m)、C3(無名峰とのコル、六八五〇m、109)、C4(ガングガ峰西稜上、七二〇〇m、1013)、南面よりの新登頂(1015、清水、赤羽、ギルミ・ドルジェ)、夕方より天候悪化、18日まで猛吹雪と大雪雪、16日夜C2ナダレに流され(多分睡眠中)、小木曾、笹川、箱山、アン・ベマ死亡。17日、C4の四人脱出、狂う吹雪の中七時間でC3、小林と合流、テント潰れ雪洞作る、ギルミとヌルブは本人の意志によりC3より尚下り、途中クレバス泊り。18日朝、ギルミからC1-C2の状態が送られてきた。午後二時、「雪が多くて進めない」と連絡あり、その後

連絡なし、多分ナダレで死亡せるものとし、BC(1022-26)、カトマンズ(111)

四、大阪府山岳連盟隊

ツォ・カルボ・カン (六五五〇m)

(カンジロバ・ヒマール)

隊員、阿部和行(隊長、43)、吉永定雄(37)、水谷弘治(33)、三好司(28) 平田英一(29)、坂下志津夫(25)。

登山活動、ボカラ(828)、ジャンダラ・パンジャン(峠)越え、ボクスンド湖(928)、ボクスンド、コーラを二日遡ってBC(930)、更に一日でABC、途中にツォ・カルボ(白い湖)あり、C1(1015、南水河末端四九六〇m)、これから三日間大雪、C2(岩稜上北水河下り)のところ、五六五〇m、1022、1025、水谷、三好、北水河のコーラ、頂上、最高峰(六五五〇m)着(16時15分、あとでツォ・カルボ・カンと命名。C2(19時25分)、撤収開始(1027) ABC(1030)、BC(113)、同発(115)、リンモ(116)、カグマラ峠雪で不可能、タイプリコット、カイガオン、ジエムラ(1117)。(注・この山行はポストの日本隊では一番スキリした登山の一つ。予想外の大雪に二登や付近の未登山の登頂が出来なかったのは残念しかし立派な地図の出来ること期待される。吉沢)

五、千葉工業大学隊

アンナプルナ南峰(七二一九m) 東稜試登

隊員、峰岸知也(隊長、41)、藤井正善(副隊長、24)、関裕明(26)、八代信弘(23)、寺本正史(23)、及能誠

岩峰登高会 Ganpo Tohokohkai



から帰途は南東尾根に向う(822)予め偵察しておいたルンゼを下り、BC(823)、途中ピク乗越し、懸垂下降など変化に富む。佐久間隊長は以前に足を怪我し、結局ここで約一ヵ月滞在、気の毒であった。(注)以上情報入手について日野市の榎本幸子嬢に感謝する。

一(23)、藤野貴雅(20)他にアンノルプ(サード)、シエルバ八名。登山活動、カトマンス集合(66)、ボカラ(68)10、BC(アンナブルナ南氷河、四三〇〇m)、C1(920四九五〇m)これからガネッシュ氷河にルートを求む、C2(926、五三〇〇m)、C3(101、南稜線直下、五八〇〇m)、稜線上の岩峰を越え、C4(1014、六四〇〇m)、1015から異常降雪、1018まで続く、(注)前記と丁度同じ、1016、C3ナダレ来襲、シエルバ動揺、C3を二度移動する、1019、天候回復、全シエルバを休養のため下ろす、いよいよ冬型天気となる。1020、全員BCへ、シエルバ行動しないので全員解雇、登攀中止、1023、六名、C5予定地(六七五〇m)に達し、持てるだけの装備を担ぎBCへ、BC(1026)28、ボカラ(114)。

六、岩峰登高会

チョンラ・ピーク(六八三〇m) 主峰初登頂

隊長、海津正彦(隊長、26)、原喜代志(23)、高橋民也(24)、佐久間久二(22)。

登山活動、ギリギッ、アストール經由ラマ部落ラマ湖の付近にBC(三三〇〇m)、中継デポ(719)、C1(726、荷上げ完了、四五〇〇m)、C2(五三〇〇m、87、こよりラッシュと決定、海津、原、高橋、ピバークしながらルート工作、氷稜、刃稜、雪岩稜と中々手強い、天気悪く一度C1へ退却(814)、C1(12(816)、岩稜途中の岩小舎(817)氷稜を越え氷原の下まで(818)、氷原上でピバーク(819)、頂上直下でピバーク(820)、頂上三人(821、9時半)11時、前夜の場所泊、氷原から帰途は南東尾根に向う(822)予め偵察しておいたルンゼを下り、BC(823)、途中ピク乗越し、懸垂下降など変化に富む。佐久間隊長は以前に足を怪我し、結局ここで約一ヵ月滞在、気の毒であった。(注)以上情報入手について日野市の榎本幸子嬢に感謝する。

7900mまでは酸素不要というが

この頃、英国の若い第一線にいて活動しているクライマーは、よく部厚な本を書いているが、私はそれらを面白く読んでいた。「ロープ野郎」を出したデニス・グレイもその一人。彼も英国山岳会に属しているが、こういう新進気鋭の登攀家に寛容な態度と理解をもって臨んでいる英国山岳会の元老達には偉いと思う。

グレイは「ロープ野郎」の終章に書いているのと同じようなことを、今度のA・Jにも寄稿しているが、その中には今後のヒマラヤの行き方を示唆している幾つかの提案がある。

即ち現代の技術と方法によれば、七三〇〇m以上の山なら四人以上、それ以上なら六人以上の登攀隊員は不要だし、倫理的にも正当化される。また、七九〇〇m以下の山では酸素なんか不要である。これ以下の高度で酸素が必要なのは医療だけで、これを登攀を進めるための具に使ってはならない。

七九〇〇m以下の山なら、高度順化に充分の注意を払えば、酸素が不要であることがわかっていく。酸素なしで高峰登山に成功する秘訣は、徐々に身体を慣らし、あるいは前進し、困難さが克服されるまでは、高くは登るができるだけ低いところに眠るということ。心をかけることなのであるという。そんな旨いことができるか、という唇を尖がらせる前に、彼の言うことをよく吟味してみることだ。

近頃日本人はネパールで、クライミング・アニマルからクライミング・インセクトになり下がっているということ。遂この間山協の研究会で聞かされた。さああらんと思う、お互いよく考えてみようではないか。(吉沢)

Tilman は 健在なり



川喜田社太郎氏筆

雁部貞夫

ヒマラヤ病患者の皆が首を長くして待っていた、ティルマンの「ネパール・ヒマラヤ」が深田久弥さんの翻訳で出版されたのは、昨年九月のことであった。このヒマラヤのベテランの足跡をここにまかに知り、永年の渇けいやははした。しかし、肝心の深田さんはその半年前、茅ヶ岳で急逝されてしまった。訪問の都度、九山山房主人愛用のウィスキーを飲み、シュラゲントワイトやスタイン等の稀観書を見せていただいた者は等しく拠りどころを失った淋しさをいだいている。

このティルマンの本で、私自身心残りだったことがいくつかある。一つは「ティルマンの校正刷が出たら見てくれ給え」といわれていたが、種々の都合(チトラル行で不在)で実現出来なかったこと。次には、ある箇所を参照するためにフランス語訳を求めておられた先生に「近日中にフランス語が入ります」と申上げていたのに、いざ私の手許に届いたのが、イタリア語訳だったので九山山房主人をいたくがっかりさせてしまったことなど今もって心残りのことである。

昨年の九月、バキスタンから帰って来たら、留守中に、出来上がったばかりの「ネパール・ヒマラヤ」が届いていた。訳者の急逝により、解説を引受けられた諏訪多栄蔵さんのご好意であっ

た。

早速、私は、解説を読んでみた。そこには「一九六八年この船ミスターフ号がジャン・マイエン島の沖で沈没、以後消息不明のままである」という文があり、ミスターフ号の末路がわかった。しかし、腑に落ちぬのは、ティルマンが消息不明になったということである。彼ほどのヒマラヤの豪者が音信不通はよいが、行方不明になったら、当然アルパイン・ジャーナルあたりで大きな記事が出そうなものである。しかし、そういう記事が現われた形跡も無い。

そこで私は以前から文通していた、ロンドン北方の或る山の古本屋の親父さんに手紙を書いた。ティルマンの消息を知っていたら教えてくれという内容である。その返事が十一月の末に届いた。それによると、ティルマンは今も元気でピンピンしているというのだ。数年前南米のパタゴニアで船が難破したが、ティルマンと乗組員は無事だったという。

この親父さんが十二月に入って、今年最後の手紙だと前置きして、ニュースを一つ知らせてくれた。ティルマンの最新刊の本が丁度出版されたところだという。書名は「In Mischief's Wake」、グリーンランドへの航海記だそうである。この手紙の末尾にティルマンを評して「A truly remarkable man for his age」と書いてあった。正にその通りである。

さあ、これでティルマンが今なお健在なのはがっかりした。今年、彼は七十三歳になったはずだが、新しい船(Bao)を手に入れたことでもあり、この先き、まだまだ何冊も彼らしい、諏訪多栄蔵さんのいう「ドライ・ユーモア」をたたえた、気骨ある紀行を書き残してくれようことだろう。

海外通信

N・Z便り (一)

秋山宏明

励ましのお手紙ありがたく拝見致しました。ご挨拶に伺う暇もなく失礼を重ね羽田を離れ、連絡の遅れをお詫し下さい。正月のご挨拶を改めて申し上げます。

現在N・Z、ミルフォード・サウンド・ダーラン山塊から隊が下山致しました。長雨に祟られましたが、一月五日主峰ツトコ、マデライン、サイム、同八日、マクファーンソン、バリア・ノブに登頂しました。

この地のレンジャ、J・イード氏は、N・Zで一番難しい山だといっております。

これから、登山日数は短かいのですが、タズマン氷河に向います。またお便りを差上げたいと存じます。



ミルフォード・サウンド・NZ南島西海岸にある。このフィヨルドは旅行者用の宿泊施設や自動車道路もある。

N・Z、ミルフォード・サウンドにて

(吉沢宛) 国鉄岳連・Z登山隊

N・Z便り (二)

秋山宏明

ダーラン山群で予期以上の成果をあげ、タズマン氷河周辺の登山も無事終了し、一四日に全員ハミティジに下山して来ました。

タズマン氷河での記録は、マルテブラン(一・六)、クック(一・一)、サブリゲン山稜、同(一・二)、リンド氷河より、同(一・二)、サブリゲン山稜二隊、グレーシャー・ドーム(一・二)。

クックには全隊員登頂に成功いたしました。プラトハウスからの下山予定の二三日には前夜からの強風にみぞれが加わり、他の全部のパーティも一日中小屋に釘づけにされ、N・Zの山の別の威力を知ることが出来ました。

N・Z鉄道関係箇所への親善訪問が控えており、折角の機会ではあります。水河の山々に心を残し、また私達の成果にも一抹の物足りなさを感じつつ下山して参りました。

(吉沢宛) ウェリントンにて

テラ・デル・フェゴより

植村直巳

謹んで新春のご挨拶申し上げます。二月三日、ブエノスよりアルゼンチン最南端の町、ウシュアイアに入り、南極へ向う砕氷船に乗込みました。

こちら夏というのに町の裏には雪が一杯、夕方には雪が町にもちらつき、東京の冬より寒く、吹く風も南極の匂いがします。

出航は一月五日、約一カ月半の予定で南極ベルグラノ基地へ入ってまい



ウシュアイアの港

ります。12・31 ウシュアイアにて

××× 二月始め、ボリビア方面に少し旅し、途中ラ・パスに立寄り、ボリビア山岳会を訪れました。同山岳会会長などからいろいろ親切を受けました。一橋隊アランダス登山隊に参加したアルフレド・マルティネスにも逢いました。

当時の吉沢さんのエクスペディションの話が出ました。彼は元気でボリビア山岳会で頑張っております。吉沢さんに宣しくとのことでした。(吉沢宛)

アルジェリー便り

市川 正

ボン・アネー。この国に約三〇〇〇mの山が、サハラのかたに存在することが判りましたが(タハト山)、残念ながら、登山を試みるチャンスはないでしょう。(吉沢宛)

UIAAの規約

(続) 第三項

c、UIAAは、その会員に各国山岳連盟の自主性の相互的尊重を喚起し、その内政についてもこれに干渉することは許されない。

b、UIAAの活動は、各々の利益活動と、政治的影響の圏外に立つ四、会員 (Mitglieder)

第四項 a、その規約と活動がUIAAの規約と活動に抵触しない限り、総ての山岳連盟はUIAAの会員となることができる。

b、各国では一つ以上の山岳連盟が会員となることできる。

c、UIAAは協議投票により、特に山岳或いは登山研究に従事する科学的機関或いは団体を、準会員として入会させることができる。

五、UIAAの機関 (Organ)

第五項、UIAAの機関は次の通り。

実行委員会 (Exekutivkomitee) 会長 (President)

総会 (Generalversammlung)

第六項 六、実行委員、会長および総会

a、実行委員会は七つの常任団体及び少なくとも五つの非常任会員よりなる。この委員会の会員は連盟そのものがあって、その代表者 (Vertreter) ではない。

b、常任会員とは、英国登山評議会 (BMC)、イタリヤ山岳会 (CAI)、スイス山岳会 (SAC)、ドイツ山岳連盟 (DAV)、ユーゴスラヴィヤ山岳連盟 (FAY)、フラ

ンス山岳連盟 (FFM)、オーストリア山岳協会連盟 (VAVQ) をいう。

c、任期三年の非常任会は、総会の決議により選ばれる。

d、各会員団体は、実行委員会に一人の代表者を派遣する。この代表者は二人乃至三人の相談役を伴う権利がある。

e、実行委員会の決議は、出席会員の単純多数決によって決定される。会長は賛否同数の場合に投票する。それによって結着をつけるためである。

f、実行委員会における代理の投票は認められない。

第七項

a、実行委員会は、会長の招集又は委員五人の文書による(共同)動議によって開かれるが、その場所はUIAAの所在地でも、会長が決定した場所でもよい。

b、一般に、実行委員会は年二回、正式の場所で開催される。必要の場合には特別の場所でもよい。

c、実行委員会は、UIAAの規約及び総会の決定または決議によって生じた問題、並びに会長またはUIAAの会員組織が提出した動議を検討する。

d、実行委員会は、総会の日時、場所を決定する。それはまた、臨時総会の招集を求めることもできる。

e、実行委員会は、UIAAの会員の入会許可或いは削除並びに、会長および副会長の選任に関する事前決議を行う。

実行委員会は、入会許可或いは削除の提案をすることができ、それは会長へのこの提案が遅くとも一カ月前に実行委員会の開催場所に到着していることが証明される場合に限る。

(I・Y)

奇窟探検

藤島 玄

『奇窟怪獄』は、江見水蔭の著で、明治四十年九月九日発行、10×45cmの小型本で定価四十銭、背紙の広告に『鳥水文集』定価七十五銭などがある。奇窟の内容は、明治三十三年十月十二日、探検隊を組織して、武州日原の鐘乳洞の底無し井戸をさぐったと、同三十四年三月十七日、独逸協会中学校の生徒十一名が、底無し井戸に底のあることを発見したという他愛のない冒険談だが、近ごろ流行の洞窟調査の先駆をなすものであろうか。

怪窟探検は、信州戸隠山登山談で、三十四年七月七日東京を発し、江見水蔭本隊長、寺崎留吉学術隊長ら十八名案内五名が、戸隠表山から裏山へ縦走し、一不動に露営して、高妻山・乙妻山を往復し、戸隠原から中社へ戻ったが、病人続出の寄せ集め隊で、隊長の装備は「余が新工夫の白色黒縁の探検服右肩から毛布(けつと)を掛け、左肩からは水筒を釣り、腰には短銃、水筒器、磁石と時計とは胸に懸け、手には洋杖(すてき)を持っている」でこの短銃をときどきぶつ放している。奇窟探検(後談「上の巻」)は、独逸学協会中学の生徒十一名は、今井順吉池田隆太中谷茂岡坂口寿七郎岡倉寿雄宮崎逸三郎今井洋一大島正武(三樹退三)萩野貞吉(河内秀直)である。「下の巻」は、明治三十五年三月二十六日、日本博物学会同志会二十余名が、日原鐘乳洞の終点に達したことを一大快報として紹介している。

本隊長
動物隊長
同隊員

市河三喜
村松 茂
大久保勝、片山文一郎、
西尾芳太郎、大飼頭二、
斎藤兵衛、橋本慎一、佐

武正一、猪瀬 猛
植物隊長 小熊 捍
同隊員 東道太郎、河田 黙
測量隊長 中野治房
同隊員 村松 茂、河口正名、梅沢親光

写真隊長 内田金太郎
同隊員 鳥山佛成、藤岡圭介
衛生隊長 島山佛成
同助手 福岡磯次郎
記録係 村松 操、坂本斗一

以上が隊員で、多くは東京府第一中学校の生徒で、これを「鐘乳洞探検隊」と名じたとある。
水蔭は「底無し井戸」までは余の探検の模様と格別相違は無いから略し、バロメータル測量の成功を、異なった点として掲げている。「弥陀が原」は洞の入口より二五・七m降り、「養ノ河原」はそれより一二m高く、「十二薬師」は入口より四七・二m降り、「底無し井戸」は入口から一〇六m降り、日原村からは七〇・七mも下にあるということが分った。案内者原島源吉に五〇本の炬火を背負わせて先導させたが「命あつての物種とやらで、私はここからもう帰ることにしよう、とて我先へは行かれるもので無いが」と進まぬを残し、五名の先発隊員が「底無し井戸」の最極点に達したとある。気圧計は七〇六・〇mmを示し、入口より二九・八mの下の方であった。その五名は、村松茂、中野治房、鳥山佛成、市川三喜、東道太郎である。その窟の奥が山奥の湯殿山まで続いていると土人の口碑が伝える日原鐘乳洞探検の内容はともかく、日本山岳会の創立者たちの氏名が懐かしく、不自由な手でノットしてみた。

年度末になりました。本年度会費未納の方がまだ大分あります。大至急御送金下さるようお願い申し上げます。

図書紹介

わが越後の山

佐藤 一栄編

越後の登山者がまとまって立派な本ができた。副題にあるとおり、越後の山についての紀行と随想集である。編集者の佐藤一栄氏は、そのまえがきにこう書いている。

「越後の岳人が、憧れと親しみをこめて、それぞれホームグラウンドの山を語り、そこに打ちこみ、生きてゆく喜びを謳って、みんなで助け合って山の友の願いを、みんなで助け合って実現させてやろうと、惜しみなく力を貸してくれた。こんなにさわやかな、量感に充ちた『山の本』が生れたことを私は登山者の一人として、心から嬉しく思っている……」

この一文はこの本の性格をそっくりいい表わしている。内容は次の二十一編の紀行と随想からなっている。

妙高山麓の四季(永高賢、加治川源流を遡る(上村幹雄)、越後の標と鈍(望月)、佐渡ガ島の自然(村川経一郎)、アンテロープ・パトロール(室賀輝男)、胎内の山と川(五十嵐)、最後に残った山(笠原藤七)、越後の山と人(井口正男)、遙かなる登高(佐藤金一)、山村民俗あれこれ(佐久間惇一)、奥まった山(若井朝晴)、飯豊山赤谷口(五十嵐篤雄)、白い峰の頂(佐藤俊彦)、いぶき差岳と私たち(平田大六)、山小屋日記(熊木貞夫)、神山弥彦の今昔(花井等)、早春の小佐渡山脈(佐藤一栄)、回想の冬山(藤井信)、一等三角点の山(藤島玄)、さわがにの道(小野健)、風雪の飯豊(立川重衛)。
山小屋日記は、塩沢山岳会が昭和四

モンブラン アイガー マルモラーダ
マッターホルン ユングフラウ
アルプスの美しい自然を心ゆくまで満喫する
ジャル・パック特別コース

スイス・アルプス 18日間

◆ 費用 ¥488,000 (ローン可) ◆ 期間 7月22日～8月8日

日程

- 近代登山の発祥地シヤモニー……………3泊
- マッターホルンのイタリア側の麓チエルビニア……………1泊
- テオドル・パスのイタリア山岳会山小屋……………1泊
- そして徒歩でスイス側の山麓の町ツェルマット……………2泊

○申し込み問い合わせ先

- アイガー北壁直下のアルピグレイン……………3泊
- チロルの中心インスブルック……………1泊
- ドロミテのふところアルゲー……………2泊
- (その他の宿泊は機内2泊、ジュネーブ、ミラノ各泊)

三井航空サービス(株)

東京都港区新橋1丁目18番1号 TEL 03-504-0271 団体課・須山

十一年創立五周年を記念して巻機山麓にクラブ・ヒュッテを建設したいきざつと、建設後の使用した会員のユニモラスな日記を紹介されて面白く。『鍵を中へおいたまた出て錠をかける。井戸清水あたりで、ホイシマツタ、どうなる』女の子がぞろぞろ通って寄って行く。良妻賢母になるよう訓示する。『小屋周辺の空ビーン、ネラたちの飲みっぷりにアキレハテル』といった調子である。

それぞれのタッチで、それぞれの越後の山が思う存分書かれていて、一風変わったムードを盛りあげている。

(山崎安治)

昭和四十六年十一月学生書房発行、五五四ページ、写真多数、定価二五〇〇円、千五百部限定。

放浪のあしあと

加藤泰 安著

桑原武夫氏から「泰安では、行動がばん立派で、お話しがついでよく、文章はまだ少し、といううわさがあつたのは十年の昔である。以来、加速度的に文章が立派になった」というすめの言葉をおくられ、自らもあとがきに「この先も、ますますすばらしい山登りや、旅をしよう、日夜秘策をめぐらしている」と書きしるした『森林・草原・氷河』が世に出てから五年、著者にとっては二冊目の本『放浪のあしあと』が出た。

前著にくらべると、行動がばんとすると著者にとっては、後向きの感がする題名の本である。「はしがき」によれば、酷使した体の一服状態の間に書きためたものであり、思ひ出話ばかりで老人くさく、恥ずかしいことわっている。

しかし、同じ「はしがき」には、自分の意志薄弱を断固として信じ、酒と

煙草を止めなければ病気を治せない医者は裁医で、名医なら酒も飲め、煙草も吸え、治療は引き受けたというべきだが、ここおろし、還暦を迎えてしまったと、行こうと思つての土地を一つおとりに歩くには十五年はかかるから、酒はそれからしよう、と節酒し、仲間に向つては、覚悟召されよ各々方とおどかしている。これはなみの思ひ出話の本ではない。

著者は、ただやみくもに高みへばかり登るサルや煙のような登山者ではない、明治生れの雄々しきロマンチストである。

「未完の探検」では、最近出かける探検隊のミクロ化と、ほんとのエクスプローラーの少ないことをなげき、こんな隊は「調査隊と称すべきで、探検隊などといわねえで貰いたい」と指摘し、一流の学者を使いこなして、偉大な業績を残した、ブルジュエルワルスキーやブルッジ、アムンゼンなどエクスプローラーの例をひき、探検者は博覧強記総合する能力を持ったアウトローでありアマチュアである探検者の精神を語っている。一方著者は、小中学生の頃より中央アジアにあこがれ、探検に興味をもつようになり、「文明社会に乗りきれない田舎者で、一介の登山者であり放浪者であつて、文明人の言葉を借りれば、アンノーンな世界の広さをいかに追求めていく非文明人」、この田舎者で放浪者は、今日まで歩いてきたのは世界の片田舎、あえていえば秘境といわれている所ばかりを好み今もつて表街道には行こうという気にならない。それでもなお、ヤングハズバンドの一八八六年中央アジア探検行の最初と最後の部分しか知らない。「私にとつてまったく肚にすえかねる口惜しさである」扉が開かれたら何ものを捨ててもこの世界に飛び込んで行く」と自分自身を語っている。そして

「ロマンチズムをその根底に持たない探検家」というものはあり得ないと確信する」と結んでいる。

「草原の旅」は、三十数年昔京都大の学在学中に單身で満州、内蒙古の奥地草原に入つて土地の人々と親しく接し人の心の美しさを知られた旅の思い出で「未完の探検」の実践であり、ヤングハズバンドの探検行に口惜しがっている最初の部分でもある。

「縄文の夢」では、霧ヶ峯高原で偶然に拾つた黒曜石の打石器から「原産樹林文化」を通して「山棲み」の遠い祖先の生活に夢を膨らげ、ヨーロッパの民衆と日本の民衆の山に対する接し方の違いを説き、日本の民衆が昔から山とかけあひを持ち、登山に深い関心を持ちつづけてきた歴史を語り、また最近の大衆登山現象を、江戸時代の講中登山への回帰とみて、その昔、教団や武士や文人墨客らの知識階級の登山者たちが大衆にその場を譲り渡した歴史の現代版であると説きあかしている。

「冬山を迎えて」や「耐寒装備について」では、登山は知識よりも修練を積んだ知恵が大事であり、知恵の働かないものは、文明の世界から原始の世界に迷い込んだ愚かなビエロの姿である。また、計量することが科学であると勘違いしている頭の堅さをいましめおしきせや、数字ではなく、実用的であり、工夫して使うことだと語る。知識、計量といふこれらの現代の神話への痛烈な批判である。「三本の指」は大興安嶺遠征中に会ったオロチョンの頭目、「この三本の指の上に月が昇つた頃、小屋に着けるだろう」といふ言葉をしるし、自分の三本の指をうさし確かめている。自然の民の知恵をうつくしく書いた文章である。これは著者が愛してやまないデルス・ウザーに通じるものであろう。

その昔の上海地での「常さん」と

「庄吉さん」との二人の交わりを語つた「明暗」は、常に悪者扱にされている「庄吉さん」を弁護して、「彼の最大の罪であり、最大の不幸は常さんといふ途方ない超好人物と二人きりで狭い上高地に住んでいたこと」と人の運命の明暗を語っている。「庄吉」のことはいままであまり語られていない。

行動の人としては意外と思われるようなロマンチズムをうたいあげた「青の光」「四人の丘」。大学に入ってからヒマラヤの峰々、知られざる峠や谷に行こうと心が定着し、ついに「骨がらみ」ヒマラヤのとりこになつてしまふ様子を書いた「ヒマラヤに魅せられて」。高所キャンプとの伝言メモから「マナスル通信」、カルカッタの街の不調和醜くさの中にインド文明の一端をかきみだした「カルカッタの印象」。

「スキーのたのしみ」では、著者のスキー術を中心にスキー風俗の変化をユモラスに語っている。そして、「山で遭つた動物たち」では熊やカモシカ、尾白鷲、オグロジなど動物にバカにされたり無視されたりした体験を語り、「山では彼らが主人であり、われわれはたまに訪れる訪問者である、彼らに對しては意気地なしであり、弱虫でありたい」と結んでいる。(堀内章雄)

昭和四十六年九月創文社発行、二四四頁、写真一一枚、地図一葉、定価千二百円。

画文集

「ヒマラヤ」

山里寿男著

あれはいつだったかと思ひながら手帳を逆にくつて行つたら、七月三十一日(土)のところに、「松屋、山里、絵」とチャンと書いてあった。同じところに「深田君原稿」ともある。どこ

から追憶記を頼まれたのであろう。ヒマラヤ土産の個展、控え室で奥さんからお茶を頂き、山里氏からは表記の画集を贈呈される。

私もその春に招かれてエベレスト街道を歩いて来たばかりだったので、会場に掲げられていた絵の一つ一つが見覚えのある景色や風物ばかりだった。

今度頂いた本にある絵やスケッチは皆この時に飾られてあったものばかりだと思ふが、ここには油絵、スケッチ、版画の他に、その時々感想の山の画家らしく短かいながらポイントを描んだ表現で書き入れられている。

白川さんが最近、これも同じく「ヒマラヤ」という二万八千円もする巨大な写真集を出したが、こうしたものにもそれに相当した意義はあるとしても一般庶民には金額的にちょっと手が出せない。

それに比べると、白旗さんや山里さんの写真集や画集は十分ノ一以下の値段であるから、山の好きな人なら少し無理をすれば買うことができる。

本はそれほど堂々たるものではないとしても、内容は豊かで、著者の人柄が、絵にも短い文章にもよく現われているし、人が見過すようなところや細かい品物にまでよく眼が届いていて、成程そうだったのかと、教えられる個所が幾つもある。

カトマンズで日本の節約登山隊がよく泊る「リ・グラス」というホテルが「赤い石楠花」という意味だったのはこの本で私はじめて知った。大体本というものは何処かに自分にとって重要なことが書いてあるものなので、い

い加減には読まない方がいいらしい。タチがどうの、構図がいいのといったことは、写真と同様に私にはわからないが、批評がましいことは何も言えないが、われわれのような素人は、あるがままに自分なりに感じとって心が

温まればそれでいいのだと思う。
 そういう意味で私もこの画文集は、
 ヒマラヤの経験者にも未経験者にも、
 微笑みを浮かべてくれるよい本だと思
 うのである。(吉沢一郎)
 昭和四十六年七月刊、東京新聞出版
 局 定価二〇〇円。七十八頁。

図書室便り

(昭和47・1)

新刊図書受入報告

山と溪谷社寄贈
 (1) 横山篤美著『上高地開発史』 昭和

共立出版株式会社寄贈
 (1) 黒岩大助著『スキーヤーのための雪

の科学—科学ブックス15—』 昭和

日本山岳協会寄贈
 (1) 『72山岳手帳』 昭和46

成蹊大学山岳部寄贈
 (1) 虹芝—山仲間の本—』 昭和46

日本大学グリーンランド遠征隊寄贈
 (1) 『グリーンランド遠征隊報告書』

昭和46
 中屋健一氏寄贈

(1) 大島亮吉著『山—紀行と随想—』
 昭和46

(2) 成蹊高会『会報 昭和7年度—』
 昭和47

(3) 東京大学スキー山岳部『部内雑誌』
 昭和37

(4) 大館高等女学校スキー部編『女子ス
 キー読本』 昭和40

(5) 大阪毎日新聞社編『山岳趣味—毎日
 叢書第五号—』 昭和3

町田和信氏寄贈

(1) 町田和信著『ギャチン—カン日記』
 昭和46

定期刊行物受入報告
 (部報・会報類)

(1) 長崎山岳会『あしあと』 (47-1)

(2) 独標登山会『独標』 No. 100, 101,
 104, 122, 123, 124, 125, 126, 127

(3) 東京白樺会『白樺』 No. 22 (46-12)

(4) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 56
 (47-1)

(5) 日本ヒンズー・クシナ会議『H・N・
 テニース』 No. 5 (47-1)

(6) 国立公園協会『国立公園』 No. 256
 266 (46-12, 47-1)

(7) 京都山岳会『京都山岳』 No. 561
 (47-1)

(8) 名古屋山岳会『月報』 No. 27 (47-
 1)

(9) 日本ネパール文化協会『会報』 No.
 6 (46-12)

(10) 東京野歩路会『山嶺』 No. 501 (47-
 1)

(11) 日本自然保護協会『自然保護』 No.
 115 (46-12)

(12) 東京都山岳連盟『都岳連報』 No. 22
 (46-12)

(13) 日本山岳協会『登山月報』 No. 31,
 32, 33, 34 (46-10~12, 47-1)

(14) 日本登山協会『山々』 No. 165
 (47-1)

〔雑誌〕
 (1) 『地図』 No. 36 46-12)

(2) 『岳人』 No. 296 (47-2)

(3) 『山と溪谷』 No. 401 (47-2)

(4) 『創文』 No. 103, 104 (46-12,
 47-1)

〔その他〕
 (1) 明大駿台山岳部『冬山合宿報告書』

(2) 愛媛県山岳連盟『愛媛県山岳連盟報
 』71・11

(3) 千葉大学ヒマラヤ委員会『71千葉大
 学東ネパール学術調査登山隊報告書』

(4) 新潟県山岳会『岳神』 No. 11
 (5) 広瀬誠氏寄贈『熊と白鷹—立山開山
 伝承の考察—』
 『信濃大出の大姥堂を訪ふ』

『嘉永六年前田利保の西白木峰(金
 剛堂)登山について』

(6) 高松一高踏査隊『東アフリカの山
 』、『冬季四国山地縦走計画書』

Journals arrived in January 1972

1. "Alpinismus" 1971-12.

2. "Die Alpen" Nummer 11,
 November 1971.

3. "Der Bergsteiger" 38 Jah.
 Dezember 1971.

4. "Deutscher Alpenverein" 23
 Jah. Heft 6, Nov/Dez 1971.

5. "Panorama of Slovakia" 1971
 -4.

6. "Rivista Senderos" No. 154
 Ottobre 1971.

7. "Rivista mensile" Anno 92,
 N. 10 Ottobre 1971.

8. "Till Fjälls" 1971.

洋書受入報告
 佐藤アル氏寄贈

1. "The American Peoples En-
 cyclopedia" by Walter Dill
 Scott. No. 1-20, 1959-1960.

2. "Comprehensive Desk Dic-
 tionary" ed. by Clarence L.
 Barnhart. 1951.

3. "The American College En-
 cyclopedic Dictionary" ed by
 Clarence L. Barnhart. No. 1,2.
 1958-59.

4. "Duden Français" ed by La
 Rédaction du Bibliographisches
 Institut, Mannheim, 1962.

1. "Alpine Skiing" by Arnold
 Lunn, 1926.

2. "Die Kluitten Der Sektion
 Uto" by Gustav Kruck, 1922.

図書委員会報告
 一月十二日(水)午後七時(ルーム)

伊倉、山崎、伊藤、岩淵、堀内、横
 山、荻野、村石、近藤、野上

「山岳図書を語る夕べ」
 二月二十四日、司会を伊倉さんに、
 書記を伊藤さんにお願いする。

二月の会報にチラシを入れる
 二、「山岳」創刊号復刻の件

「増補」は全部第二号に入れること
 にする。

一月中に発行できる予定
 三、和書所蔵台帳の件

二月初旬ころには完成する予定
 四、洋書目録の件

三月中には完成する予定
 五、その他

五万分の一の実測図は、伊倉さん、
 武田さんに整理していただく。

会務報告

二月理事評議員会

(3日午後6時本会ルーム)

出席者 成瀬、吉沢副会長、中屋

山崎、坂下、神原、板倉、野上、松永

大森、中島、神崎、熊谷、村井各理事

望月、織内、金坂、津田、村山、折井

高山各評議員、今井監事

・岩手支部設立の件 (山崎)

盛岡市を中心に岩手在住会員により
 岩手支部設立の準備が進められ、支部

規定ごとの一件書類が送付されてきた。
 設立について異論はないが、岩手

支部設立準備委員と一度直接話し
 あった上正式決定したい。この件了承。
 ・会費値上げの件 (中屋)

郵便料その他諸物価値上げにともな
 い会費の値上げを検討している。定款

変更をしなければならぬが、一応値
 上げの方向で、時期、金額、方法など
 具体的問題は財務委員会、および常務

理事会で検討したい。この件了承。

・上高地山岳研究所の件 (村山)

環境庁自然保護局でペンディングと
 なっており、自転車振興会の交付金も

そのためまだ決定していない。至急山
 荘委員会を開き今後の問題を打ち合

せたい。この件了承。

・秩父宮学術記念賞の件 (村山)

一九七〇年の本会エベレスト隊の業
 績に対し第八回秩父宮学術記念賞が授

賞されることになり三月三日銀行クラ
 ブで授賞式が行なわれる。松本徹章か

らのメダルの授与式はそれがすんでか
 らごく内輪に本会ルームで行ないたい。

なお賞金十五万円は本会会計に繰
 り入れ、報告書発行の一部に当てる。

この件了承。

・山岳創刊号復刻の件 (野上)

三百部作ったが好評である。ほとん
 ど予約者に配領した。二、三号も続け

て出したい。

・次期役員

次期常務理事会で最終的に案をまと
 める。

△報告

・ネパール・マヘンドラ国王逝去の
 件 (神原)

マヘンドラ国王は一月三十一日逝去
 された。二月二日ネパール大使館で榎

藤井、吉沢、神原、丹部の各氏が焼香
 してきた。なお本会から生花一対をさ

げた。二月十二日ネ大使館で告別式
 が行なわれる。

現地支部長会議兼現
 地小集会のお知らせ

昭和四十七年度現地支部長会議兼現
 地小集会は秋田支部担当、矢島町山岳
 会、鳥海村山岳会、羽後山岳会協賛で
 昭和四十七年六月十六日(金)十七日
 (土)十八日(日)の三日間国定公園
 鳥海山を中心に行なわれることになっ

た。全国各支部から多数会員の出席を期待している。実施要項は次のとおりである。

実施要項

- ・期日 六月十六、十七、十八日
- ・場所 鳥海山
- ・参加費 一名五千元（往復交通費を除く）
- ・集合場所 秋田県由利郡矢島町（矢島線矢島駅）ただし奥羽線利用者は奥羽線湯沢駅前集合のこと（貸切りバスで矢島の集合地に向かう）
- ・宿泊所 初日、鳥海村旅館「国民宿舎鳥海荘」二日目、矢島町地内（鳥海山五合目）「蔵川ヒュッテ」
- ・行動予定

- （初日）矢島→鳥海荘泊、午後三時より支部長会議、午後五時より支部長、小集会参加者交歓会
- （第二日）小集会A班、鳥海荘→七ツ釜→鳥海山頂→蔵川泊
- B班、鳥海荘→駒の王子→蔵川→鳥海山頂→蔵川泊
- （第三日）午前中自由行動、午後下山→矢島解散
- ・服装および携行品 ①晩春の残雪の山行服装、②第二日は夏山用寝袋その他嗜好品、非常食。
- ◎参加希望者はあらかじめ本会事務局あて御連絡下さい。時間その他は追って発表します。

山岳第一年第二号覆刻版のお知らせ

明治三十九年四月発行の本会機関誌「山岳」覆刻版は創刊号を二月上旬三百部限定で発行したところ、大変好評で、ほぼ売り切れました。

第一年第二号以降、第四年までの各号を引き続き三百部限定で覆刻する予定です。第一年第一号は四月上旬発行を予定しております。頒価は創刊号と同様千八百円です。送料、荷作料二百円を含め希望者は金二千円也を本会図書委員会あて大至急御送金下さい。

スカルノ峰の名称について

インドネシアの西イリアン所在スカルノ峰について、一九六五年の同革命いらいスカルノの名は禁句となり、山名もブンチャク・ジャヤプーラと呼ぶことになっているという注意を在インドネシア日本大使館から受けました。お知らせ致します。（日高）

ルーム日誌（47年1月）

- 10日（月）常務理事会
- 12日（水）青年懇談会
- 17日（月）図書委員会
- 18日（火）理事評議員会
- 19日（水）校門山岳理事会
- 20日（木）学生会委員会
- 21日（金）青年懇談会
- 26日（水）集委員会
- 27日（木）婦人懇談会
- 28日（金）常務理事会
- 29日（土）図書委員会
- 一月中入室者 二八三名

会員異動

- 物故会員 昭和四七・一・二七一 岡徳徳之助
- 九逝去

会員名簿 1971 訂正

- 二四頁下三行へ一行挿入 長田正行
- 六四四 六九・六 千一九一 日
- 野市百草九九 百草園地二七
- 四一〇三（〇四二五）九二一八
- 五三一
- 二五頁下四行三七一電話（〇七九八）三六〇一七六八

第二八〇回現地小集会

集委員会 平野隆司

第二八〇回の現地小集会是八方尾根黒藜平で一月十五、六日の両日にかけて行なわれた。今回はスキーとウィスキーの両方を楽しもうという趣向だ。この黒藜平には立派なスキー場といくつかの山荘が建っている。われわれはこの中の代表的山荘である中央大学と明治大学の二つを両校山岳部の御厚意で利用させていただいた。今回は現地の山荘へ直接集合ということで、参加会員それぞれ思い思いの趣向を凝らしたアプローチで当日山荘に集まった。

このあたりは実にパラエディに富みいかにも山岳らしいと思った。われわれが集合場所の中央大学山荘に着いたのは午後の二時過ぎであった。前室で靴や体に着いた雪を落し中に入ると、すでに前日から準備のためにひと足先に入山していた学生がガンガンと焚かれていた。今までの冷たい風に当たっていた頬は暖かい室内に急に入ったためかつかとほてっている。一服して寝室になっている二階に登る。下

でストーブを焚いているので、ここもすごく暖かい、何よりも温度が低いのが心地よい。コンパが始まる午後六時前には、御馳走が盛られたテーブルを囲んで全参加者が顔を揃えた。幾人かの会員は、すでにうすらと日焼けしている。コンパは会員の吉阪隆正氏の音頭で乾杯して始まった。自己紹介も終わり、アルコールが適度に回った頃には歌も出だし、楽しい雰囲気となる。雪の中の山荘という自然の臭いがする。そんなことがわれわれをリラックスさせるのか、とにかく良く飲み食べ話したコンパだった。明日のスケージュールもあるのでコンパは十時過ぎに一応お開きとなった。

翌十六日は数日來の高温もぐつと降り、スキーにはとても良いコンディションとなる。早朝より元氣よく外に飛び出して行く会員も見受けられた。十時には宝捜しゲームが催され、大変素敵な賞品をいただく。その後各人それぞれのスケジュールに合わせて、二人とお世話になった山荘を離れて行く。今回は五十名以上の会員が集まりまた盛大に行なうことができた裏には新しく発足した青年懇談会の諸氏の御協力が多き、紙面を借りまして御礼致します。また山荘を心良く利用させていただきました。また山荘を心良く利用させていただきます。また山荘を心良く利用させていただきます。また山荘を心良く利用させていただきます。

メイスン教授の便り

昨年三月下旬、パークシャーのリーディングスへ転居したという通知をくれたケニス・メイスン教授から、こんな便りが届いた。

興味深い『山岳』65年の送付をうけ——といつても勿論私は英文梗概し

か読めないのだが——日本山岳会と貴兄とお礼を申したい。ネパールが再び登山解禁をしたことは喜ばしい。とはいえ五〇年、六〇年前と比べ、ヒマラヤの登山が、なんとお金のかかるものになったのだろうか！

私はテレビで札幌の冬季オリンピックを毎日見ているが大変面白かった。そして日本がスキー・ジャンプで二位、二位、三位を獲得した素晴らしい業績をお祝いを述べた。私が初めてスキーを始めたのは、一九一〇年、ヒマラヤの山中だったが、当時そんな人間は全くなかった。それで練習には苦労と間違ひばかりだった。後年スイスで私がスキーをやったとき、よくスキーの教師が生徒にいうのに「ダメダメ！君のスキーはメイスンのようだ！」という言葉がよく出たほどである。爾来、私はスキーが一向上達しなかった。

以上がこの二月八日付の手紙の大意である。すでに八十四歳を過ぎ、室内では車椅子を使い、過ぎた日々の回想に生きているメイスン教授夫妻の健康を祈ってやまない。（望月達夫）

エベレスト登山公式報告書の刊行について

エベレスト報告書編集委員会大変おそくなりましたが三月一日付をもってようやく刊行の運びとなりました。当初は会報三〇八号でお知らせしたように、本会内部用（エベレスト委員会発行）と外部用（毎日新聞社出版局発行）の二本立てで編集することにしておりまして、都合により、一本化し、日本山岳会発行に致しました。B5版オフセット印刷、布織表装箱入り

第一部 登山報告……四一四頁
第二部 学術報告……一一四頁
の二部よりなり、I部、II部とも豊富

な図版、資料が収録されております。

つきましては会員各位には左記により頒布致しますので、至急代金、送料を添えて事務局へご注文下さい。

記

一、頒価 二、五〇〇円也(会員一割引 二、二五〇円)

一、送料

◇東京都の区内

……二二〇円

◇第一地帯

……三〇〇円

関東・甲信越・東海三県、山形、宮城、福島、石川、富山、滋賀の各府県

◇第二地帯

……四〇〇円

山口を除く中国・四国、滋賀を除く近畿、福井、青森、秋田、岩手の各県

◇第三地帯

……五〇〇円

北海道、九州、山口県

報告書の重量が二kgを越えるため、書籍小包の適用を受けられませんが、普通小包となります。悪しからずご了承下さい。

なお、これとは別に第II部学術班報告書の別冊(送料共頒価一、〇〇〇円)が若干部数残っておりますので、必要な方にお頒け致します。

タンボチエ僧院 チベット大蔵経寄贈

エベレスト登山の帰途、タンボチエの「タレン」 Nawang Tenzing Jangpo より、東洋文庫で出版した「サキヤ派全書集成 全一五巻」(The Complete Works of the Great Masters of SAKYA SECT. of the Tibetan Buddhism, 15 Volume)を入手したので、何とか助力して欲しい。ついでに代金の半額は都合するが、残りの半額は日本で考えて欲しいとの申出が日本エベレストスキー探検隊にあった。

かねてより松方隊長も、日本のエベレスト隊として、何か記念になるものを現地のために残したいという希望をもっておられたこともあり、松方隊長のお骨折りで、東洋文庫からの協力で格安な値段で入手することが出来、スキー隊と合同で送ることにした。

本書は一五冊で五〇kgにも達するもので、現地への輸送が問題になったが、昨年十月下旬、クムジンのホテルに出かける、会員宮原魏氏に託して、タンボチエ僧院に向け発送した。この度、十一月十日付、同ラマ僧正より次のような礼状が届きましたので、お知らせします。

Dear Sir,

Thank you very much for sending the books, and I am really happy to have these precious books in my monastery library.

This work, you have done, is very appreciated by all of us, as their books are so rare and expensive. Please accept my and monks thanks and good wishes,
………中略………
We all pray to meet you soon.

Regards, yours

N. T. Jangpo.

(大家)

計 報

佐藤隆太郎氏(会員番号七五一番)大正九年十月入会。紹介者(信太儀右衛門。昭和四十五年十二月永年会員となる(山歴等については、会報三〇七号七頁、永年会員紹介の項参照)。病氣静養中のところ、昭和四十六年十二月二十四日永眠されました。享年八十歳。大智院隆智教養芳園居士。謹しんで哀悼の意を表します。

〔遺族〕世田谷区等々力二ノ六ノ六妻、佐藤すま。

・第八回秩父宮記念学術賞授賞

一九七〇年日本山岳会エベレスト登山隊の業績に対し、第八回秩父宮記念学術賞が授与されることに決定、三月三日午後三時から銀行クラブで授賞式が行なわれた。松方隊長が出席の予定であったが、まだ医師から許可が下りず欠席され、大塚登攀隊長が松方氏の代理として秩父宮妃殿下から賞牌と賞金十五万円を授与された。

終わって記念パーティが行なわれ盛会であった。

なお式後本会ルームで松本徹章から寄贈されたエベレスト記念メダルが三田会長より各隊員に贈呈された。

昭和四十七年三月十日発行

東京都千代田区神田錦町三一二 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎安治

(233) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A 5判440頁〉定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編

〈A 6判368頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

総索引 1,000円

65年 2,000円

64年 2,000円

63年 2,000円

62年 2,000円

61年 1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リネン綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

アシナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A 12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965

東京大学カラコルム遠征隊編

〈B 5変型判220頁〉定価3,000円

登山・スキー用具専門店

山の店

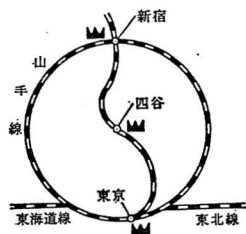
大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべし なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして、山ですから
かたがて、山ですから

かたがて、山ですから
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区日本橋通2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区日本橋通2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区堂島上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・東区 1-4 (28) 3440

